

**P3-2-2 子宮頸部粘液性腺癌胃型症例の臨床組織学的検討**

長野市民病院

森 篤, 山本さやか, 佐近普子, 西沢千津恵, 飯高満三芳

【目的】WHO 分類 (4th edition 2014) では頸部腺癌の項に gastric type が加わった。新分類に従って過去 8 年間の頸部粘液性腺癌症例を再分類し, gastric type の臨床組織学的検討をおこなった。【方法】対象は過去 8 年間に手術した頸部粘液性腺癌 21 例。進行期 1B 17 例 2B 4 例。これを HE 染色所見をもとに usual type (u) と gastric type (g) に再分類した。HIK1083 MUC6 p16 の染色を行い type 間で染色性を比較した。手術検体での腔浸潤, 基底部浸潤, リンパ節転移, 卵巣転移, 腹膜播種, 腹水細胞診陽性のそれぞれを 1 点として予後不良スコアを算出し, 両群間で比較した。初診時の血清 CEA, CA19-9, CA125 についても比較検討した。【成績】usual type (u) 12 例, gastric type (g) 7 例, signet-ring cell type 2 例と再分類された。HIK1083 陽性は u 1 例 (8%) g 6 例 (86%)。MUC6 陽性は u 11 例 (91%) g 4 例 (57%)。予後不良因子の平均は u 0.67 点 g 1.85 点。p16 陽性は u 10 例 (83%) g 1 例 (14%) であったが, g の 6 例 (86%) で近傍の扁平上皮に koilocytosis が認められた。CA19-9 値は u (2.0-142.5 U/ml median 4.5), g (2.0-1651.8 median 23.6)。CEA, CA125 に差はみられなかった。【結論】WHO 分類 (2003) で診断した子宮頸部粘液性腺癌のうち 33% が gastric type であった。g は手術標本での予後不良因子が多く, 予後不良であることが推測された。g では CA19-9 が高値となる傾向がみられた。g の 86% で p16 陰性であったが, koilocytosis は高頻度にとめられ HPV 関与の可能性は否定できないと考えられた。

**P3-2-3 LBC 法の Papanicolaou 染色では胃型形質病変を推定することは困難である**

山梨大

端 晶彦, 大森真紀子, 奈良政敏, 平田修司

【目的】子宮頸部胃型形質病変の代表的疾患としてとして分葉状頸管腺過形成 (Lobular endocervical glandular hyperplasia, LEGH) がある。LEGH は時に最小偏倚腺癌や胃型腺癌との併存が報告され HPV 陰性頸部腺癌の前駆病変の可能性もあり検討が必要な重要な疾患である。LEGH は水様性帯下を認めることもあるが自覚症状のない症例もあり子宮頸部細胞診 (直接塗抹法, 従来法) で通常見られる頸管腺細胞質内のエオジン好性の粘液とは異なる淡黄色調の胃型粘液の所見 (いわゆる two color pattern) が LEGH の発見の端緒となることもある。近年液状化検体細胞診 (LBC 法) が普及してきたが我々は BD Sure Path による Papanicolaou 染色 (Pap Stain) では胃型形質病変を推定することは難しいことを報告した。今回各種 LBC 法における胃型形質病変推定の可否について検討した。【方法】5 例のインフォームド・コンセントを得た LEGH 症例で検討した。従来法と LBC 法 (BD Sure Path 法, ThinPrep 法, TACUS 法) により頸管細胞を採取し Pap Stain にて観察した。細胞診標本における胃型粘液細胞の存在および部位は HIK1083 の免疫染色を行い確認した。【成績】従来法において胃型粘液は Pap Stain で黄色調を示し通常頸管腺粘液のピンク調との違いが容易に観察できた (two-color pattern)。各種 LBC 法では免疫染色で HIK1083 陽性細胞は確認できるが, Pap Stain では two color pattern がわからず胃型形質病変を推定するのは困難であった。【結論】従来法とは違い各種 LBC 法による Pap Stain では胃型形質病変を推定することは難しいと考えられる。

**P3-2-4 再発高リスク子宮頸部非扁平上皮癌 IB-IIB 期に対する術後補助化学療法の検討 (SGSG 008/Intergroup study)**

三海婦人科がんスタディグループ

島田宗昭, 佐藤誠也, 太田 剛, 小島原敬信, 徳永英樹, 高野忠夫, 田部 宏, 岡本愛光, 山口 聡, 藤原 潔, 西尾 真, 牛嶋公生, 板持広明, 紀川純三

【目的】子宮頸部非扁平上皮癌は扁平上皮癌に比して予後不良であり, その一因として放射線低感受性が指摘されている。本研究では, 再発高リスク子宮頸部非扁平上皮癌 IB-IIB 期に対するタキサン製剤 (パクリタキセル: PTX あるいはドセタキセル: DTX)/カルボプラチン (CBDCA) 併用術後化学療法の有効性及び安全性を明らかにしようとした。【方法】再発高リスク子宮頸部非扁平上皮癌 36 例 (IB1 期: 8 例, IB2 期: 9 例, IIA 期: 3 例, IIB 期: 16 例) を対象とし, TC/DC 療法 (PTX: 175mg/m<sup>2</sup> あるいは DTX: 60mg/m<sup>2</sup>, CBDCA: AUC=6) を術後 6 コース施行した。主要評価項目は 2 年無増悪生存率 (PFS), 副次評価項目は薬物有害反応とした。本試験に参加した全ての施設で倫理審査委員会の承認, 文書による試験参加の同意を得た。【成績】年齢の中央値は 44 歳 (30-64 歳) であり, 骨盤リンパ節転移陽性例は 25 例, 子宮傍組織浸潤陽性例は 6 例, とともに陽性であった症例は 5 例であった。術後化学療法完遂率は 72% (26/36 例) であった。経過観察期間が 2.3 年間 (中央値) における 2 年 PFS 率は 75.0% (95%CI: 63.3-93.8%) であった。Grade 3 以上の血液毒性は, 好中球減少 29 例, 貧血 8 例および血小板減少 7 例, Grade 3 の発熱性好中球減少症を 2 例に認めた。Grade 3 の非血液毒性は悪心, 筋肉痛が各々 2 例であった。【結論】再発高リスク子宮頸部非扁平上皮癌 IB-IIB 期に対する術後化学療法は有効で, 薬物有害反応も許容範囲内であったことから, 有用であることが示唆された。